琉球大学学術リポジトリ

台湾原住民にみる伝統文化教育と音楽を通した新たな文化継承の形：台湾原住民ブヌンの事例を中心に

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部
	公開日: 2018-04-11
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 岡田, 恵美, Okada, Emi
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/39208

台湾原住民にみる伝統文化教育と音楽を通した新たな文化継承の形

―台湾原住民ブヌンの事例を中心に―

岡田恵美

The self-cultural education seen in Taiwan indigenous peoples and the new media and opportunity of the inheritance of cultural tradition by music

Emi OKADA

0. はじめに

台湾は多民族・多言語社会で形成され、人口の多い順に、本省人、外省人、客家人、台湾原住民で構成されている。本省人は福佬人または閩南人とも呼ばれ、18 世紀末または 19 世紀初頭から中国大陸から台湾に移住してきた漢民族を示す。社会言語学者の黄の調査［黄 1993、谷口 2005: 66］に依拠すれば、全体の 73.3% をこの本省人が占める。外省人や客家人も漢民族ではあるが、外省人（13.3%）は第二次世界大戦後に蒋介石率いる中国国民党・国民党軍とともに台湾へ移住した人々である。また、客家語を母語とする客家人（12%）は主に福建省や広東省にルーツを持つ華僑に多く見られる民族である。一方、これら移住者である漢民族に対し、台湾に先住していたオーストロネシア語系諸語を話す人々が台湾原住民[1]であり、全体の 1.7% に過ぎない。

台湾原住民の中でも平地の居住者は、漢民族との混血や漢化が進んで「平埔族」と呼ばれ、他方、山岳地域や島嶼地域、山岳に囲まれた東部の平地に居住する台湾原住民は、独自の言語や文化・慣習を日本の統治下に置かれるまでは保持していた。1895 年に日本による台湾統治が始まると、漢化していない後者の台湾原住民は、差別的な意味を含む「生蕃」「蕃人」と称され、同化政策が強化される中で原住民の一民族であるセデックの集落で起きた 1930 年の「霧社事件[2]」に代表されるような抗日運動も一部では見られた。統治時代の後期には、原住民は「高砂族」として日本でも知られるようになり、太平洋戦争中は、「高砂義勇隊」として多くの原住民が日本軍の一部隊として戦闘に参加した。

2017 年現在、台湾政府は台湾原住民として 16 民族を認定している。次頁の【表 1】で示すように、人口の多い順に、1）アミ（阿美）、2）パイワン（排湾）、3）タイヤル（泰雅）、4）ブヌン（布農）、5）タロコ（太魯閣）、6）プユマ（卑南）、7）ルカイ（魯凱）、8）セデック（賽徳克）、9）ツォウ（鄒）、10）サイシャット（賽夏）、11）タオ（達悟）別名ヤミとも呼ばれる（雅美）、12）クバラン（噶瑪蘭）、13）サキザヤ（撒奇莱雅）、14）サオ（邵）、15）サアロア（拉阿魯哇）、16）カナカナブ（卡那卡那富）である。

こうした台湾原住民は前述の通り、台湾全人口の 2% にも満たず、日本統治時代の日本語教育や同化政策、戦後の蒋介石政権による原住民に対する隔離政策や差別など、苦難の歴史を歩んできたことは想像に易しい。しかしながら、1996 年の台湾民主化を経て、21 世紀に入ると、台湾原住民自らによる権利回復運動や、台湾原住民として、

*琉球大学教育学部音楽科教育専修所属

【表１】
2017年（中華民国106年）9月期
原住民族人口 - 民族別
［原住民族委員会 人口統計資料
2017］

台湾原住民（16民族名）	人口（人）
アミ（阿美）	207,940
パイワン（排湾）	99,884
タイヤル（泰雅）	89,234
ブヌン（布農）	57,982
タロコ（太魯閣）	31,195
プユマ（卑南）	14,011
ルカイ（魯凱）	13,225
セデック（賽徳克）	9,854
ツォウ（鄒）	6,628
サイシャット（賽夏）	6,580
タオ（達悟） 別名：ヤミ（雅美）	4,584
クバラン（噶瑪蘭）	1,456
サキザヤ（撒奇莱雅）	916
サオ（邵）	775
サアロア（拉阿魯哇）	382
カナカナブ（卡那卡那富）	324
未申告	12,950
合計	557,920

また各民族としての民族的アイデンティティを主張する動きが徐々に活発化している。（財）原住民族文化事業基金会は、原住民専門の TV チャンネル「原住民族電視台 TITV16」の放映を開始し、現在では専門ラジオ局「原住民族廣播電台 FM96.3 Alian Radio」も抱え、各民族の言語によるニュースや情報番組が台湾全土に届けられている。また、原住民が主体となったスポーツの祭典や、音楽祭、芸能祭も頻繁に開催されるようになった。こうした場が増加することによって、原住民の若者世代における各民族への帰属意識や独自の伝統文化を再評価する動きも高まりつつある。

このような近年の動向を反映し、2017年5月には、台湾の国会にあたる立法院にて「原住民族語言発展法」（全30条）が可決され、翌月より施行されている。その第一条では、原住民の諸言語を「国家言語」として認め、その保存・伝承を促進することを立法の目的と明言している。また第19条では、初等・中等教育12年間の国語教育の中で、原住民の諸言語の授業を開設すること、第20・22条では、中央教育主管機関が中心となり、その諸言語の指導が可能な教師の育成に取組むことが言及されている。

台湾原住民が抱えるこれまでの言語喪失や民族文化の伝承の危機という問題は、筆者の暮らす沖縄県においても類似の課題でもあると言っても過言ではない。沖縄県も9月18日を「しまくとぅばの日」と制定し、琉球方言の保存や次世代への継承を促す取組みを2006年から実施してはいるが、県や教育機関が連携して積極的に促進させない限りは、若年層を中心に大きな効果を得るのは難しい状況にあると言えるだろう。

本稿は、台湾原住民の近年の母語復興や伝統文化の再評価の動向に注目し、第一の研究目的として、台湾原住民の子どもたちが通う小学校では、どのような母語教育・伝統文化教育が実際に行われているのかという点を、第1節で考察する。そこでは、台湾原住民の中で4番目に人口の多い（【表1】参照）、ブヌンの児童達が通う小学校を事例とする。そして第二の研究目的として、これまでの「保存・保護対象」や「観光資源」としての原住民文化の存在価値とは隔たり、原住民の若年層が自らのアイデンティティの拠り所として、原住民文化の発信を行う新たな動向について、第2節で考察する。本稿の情報は、2015年3月に台東県延平郷桃源村のブヌン集落で実施した調査や、2017年7月に筆者が主催した琉球大学でのシンポジウムに招聘した高雄市桃源区建山国民小学校教員・ブヌンの児童への調査、2017年10月に台北市で開催された音楽パレードでの参与観察から得たものである。

1. 高雄市桃源区建山国民小学校における ブヌン文化教育の取り組み

1.1　ブヌン語教育の現状と課題

台湾の教育制度は、日本同様に初等教育6年（国民小学）、前期中等教育3年（国民中学）、後期中等教育3年（高級中学）の6-3-3制である。本節では、高雄市桃源区の山岳地域に位置する建山国民小学校を事例として、そこでの母語教育や文化教育の諸相を考察する。

建山国民小学校は、2017年時点で全校児童46名、教職員約20名の小規模校であり、両親が共にブヌン、あるいは片親がブヌンという家庭環境の児童が通う。ブヌンは、台湾南部の中央山脈一帯に比較的広域に居住している民族で、長老制度を根底とした父系制の共同体社会で成立している。他の台湾原住民と同様に、大部分がプロテスタント系のキリスト教徒である。彼らの母語はブヌン語であるが、児童の親世代は度重なる外来政権による言語政策の中で、北京語（国語）を第一言語として育った世代であり、家庭内や世代間でのブヌン語の継承が厳しい状況にある。前述の通り、台湾の言語教育環境は、歴史的に見ても各政権の政策を直接的に反映したものであり、日本統治時代の日本語教育・同化政策から、戦後は漢化政策の中で北京語が国語として制定され、原住民の諸言語、いわば彼らにとっての母語は排除されてきた。しかしながら、1996年の台湾の民主化を機に台湾人としてのアイデンティティが希求され、政治的戦略においても多言語・多民族社会としての台湾が再認識される中で、言語政策も新たな動きを見せた。2001年には「国民中小学校九年一貫課程」（国民小学・国民中学九年一貫カリキュラム）において、「郷土言語」（閩南語、客家語、原住民諸語より一言語を選択）の教育が小学校では必修科目に規定され、週一度の授業が実施されるようになった。

こうした言語教育政策により、建山国民小学校でも、週一回、ブヌン語の授業が全学年において実施されている。児童は、ブヌン語のフレーズを毎回一つずつ学習していく。同校の陳俊延校長は、ブヌン語教育のプラス面とマイナス面について次のように指摘する。プラス面は、年配者を中心に現在もブヌン語を話せる人が地域に多いことや、キリスト教会の宣教長老がブヌン語で日曜礼拝を行う点である。台湾原住民に限らず、プロテスタント系のキリスト教会が独自の民族言語の存続に一役買ってきたという事象は他のアジアの国々でも多く見られる。また一方でマイナスの側面としては、学校教員の多くはブヌン出身者ではなく、例えブヌン出身であっても若い教員はブヌン語が話せず、ブヌン語で授業を行うことが難しいという現実がある。また、週一回のブヌン語の授業では学習効果に限界がある点や、ブヌン語も厳密には更に5グループの方言に細分化され、それぞれの方言で発音が異なるという点も指導が困難な要素であるという。母語の伝承には家庭での会話がブヌン語で行われることが最も効果的ではあるが、児童の親世代が話すことができない以上、学校がバイリンガル式の学習環境を整えることが重要な課題であると陳校長は指摘する。

1.2　ブヌン文化教育の実践

台湾では、1990年代から2000年代初頭にかけて、言語政策よりも若干早く郷土文化への理解に関する新たな動向が教育分野で見られた。1993年改訂の「国民中学課程標準」により、閩南文化、客家文化、原住民文化のいずれかを選択し、その伝統的儀礼や民謡・舞踊といった実践を通して学ぶ「郷土芸術活動」という科目が1997年から中学校に加わった。それに引き続き、1994年改訂の「国民小学課程標準」で追加された、小学校中高学年対象の「郷土教学活動」も1998年から小学校現場に導入されている［谷口 2005:68］。

建山国民小学校では、ブヌンの伝統的祭事・儀礼や慣習を学ぶ機会を、毎週水曜日の午後に学年別の授業という形ではなく、2年生以上は誰でも自由参加の形態として提供している。このブヌン文化教育の第一の特徴には、学校現場と地域コミュニティの固い連携が挙げられる。学校側は地域のブヌンの長老を招聘し、長老等はブヌン語を用いてブヌンに纏わる文化を児童に教授・伝承する。また第二の特徴は、学外での体験型学習が多い点である。ブヌンの狩猟文化に関しては、スリングショット（ゴム銃）や弓矢、獲物の仕掛け作り等、農業に関しては、地域の主要な農作物であ

る粟の種まきや栽培方法の体験、地元の特産物を用いた漬物やドライフルーツ作り、またブヌン特有の衣装や装飾品作り等、児童らは多岐にわたってブヌンの文化について体験を通して学ぶ。

【写真1-4】建山国民小学校におけるブヌン文化教育の事例（写真：陳俊延校長 提供）

（写真1）粟栽培についての体験学習

（写真2）手作りスリングショット（ゴム銃）

（写真3）狩猟の仕掛け作り

（写真4）独自のブヌン文化教材アプリ

また建山国民小学校のブヌン文化教育における第三の特徴として、文化教材のデジタル化を指摘することができる。筆者の知る日本の学校現場以上に、台湾の小学校ではICTが積極的に授業の中で活用されており、児童達はタブレット端末を用いて、ブヌンの文化に関する調べ学習を行っている。教員側も、「ブヌンのことば」「ブヌンのカレンダー（伝統的な1年間の生活を描画したもの）」「ブヌンの神話」「狩猟文化」といったデジタル教材（アンドロイド版アプリ）を次々と開発し、タブレットからQRコードを通して児童に限らず誰でもダウンロードできるような環境を整備している（写真4）。

そして、ブヌン文化教育の取組みの第四の特徴には、ブヌンの伝統的な儀礼やそれに伴う歌・舞踊を単に体験して学ぶだけではなく、他者へ披露できるレヴェルにまで日頃から練習を重ねている点が挙げられる。2017年7月1日に琉球大学で開催されたシンポジウム＆ミニ・コンサートのために、建山国民小学校の5名の教員の引率のもと、3年生から6年生までの児童23名が来学した。そこではブヌンの主に狩猟に纏わる一連の伝統的儀礼が児童達によって次のように披露された。

【写真5・6】建山国民小学校児童による
ブヌンの伝統的儀礼（筆者撮影）

（写真5）8部合唱

（写真6）狩猟の報告の様子

1）天の神への祈りの儀式

2）狩猟のための祈りの儀式

男性リーダーを囲んで男性達が円になり、安全な帰還と獲物が多く採れるように祈る歌詞が、リーダーと他の男性とのコールアンドレスポンスで歌われる。

3）女性達による粟酒の製造

狩猟に出かけた男性達を待つ間、女性達は臼に入れた粟を強く打ち、醸造し、粟酒の準備を行う。その様子が女性達による二部合唱とともに描写される。

4）帰還を知らす銃声

多くの獲物を携えて無事に村に帰還したことを知らせる様子が男性達によって歌われる。

5）ブヌンの象徴的儀礼である8部合唱（写真5）

男性達が円陣を組んで声を重ねていく。複数の声を調和させることによって、豊作や平安を齎す神への感謝を示す儀式である。

6）狩猟の報告（写真6）

捕まえた獲物を携えて、男性達が順々に村人達に力強く報告していく様子を示す。

こうした伝統的儀礼が約20分間に纏められ、おそらく何度も練習を積み重ねてきた児童達は、ブヌン出身の教員による太鼓の合図に合わせて、彼ら自身のブヌンの儀礼や歌を日本の観客を前に力強く生き生きと演じていく。そうした様子からも、単に自らの帰属する文化を学び実践するだけではなく、こうした異文化の他者に見せることを意識した自文化教育の在り方も、伝統を継承する上で若年層の大きな活動動機となっていることがわかる。即ち、自らの文化を当事者達が他者に向けて発信すること、そうした場を多くの人達と共有すること、そこでの反応を自らにフィードバックすること、こうした一連の流れが実は今日の若年層への伝統文化の継承において重要な核と言えるのではないだろうか。

次節では、原住民の若年層が音楽活動を通して、新たな形で自らの原住民文化の発信を行っている動向に注目する。

2. 音楽を通した新たな原住民文化の継承と文化発信

2.1　これまでの「保存・保護対象」「観光資源」としての原住民文化

台湾原住民の文化は、歴史的に見れば、日本統治下においては特に日本人学者の研究の対象とされてきた。原住民の歌や奏でる楽器は、当時の日本人研究者にとっては全く耳にしたことのない興味深い音楽に映ったに違いない。大正11年（1922年）には音楽学者の田辺尚雄が、台湾総督府の協力を得て原住民のタイヤルやツォウ、パイワンの音楽に関する調査を実施している。また戦中の昭和18年（1943年）には、同じく音楽学者の黒沢隆朝が台湾各地で調査を敢行し、そこでの調査結果は1973年出版の『台湾高砂族の音楽』に収められている。黒沢は、特にブヌンの音楽について、「この部族の民謡は全てDo-Sol終止の旋法[3]であり、かつ和音唱法と男女の混声合唱が行われている」［黒沢 1952: 23］と言及しており、8部合唱と呼ばれる、徐々に高音へと声を重ねてゆく倍音唱法や、ブヌンの男性が使う弓琴の奏法か

ら5音音階の発生についても論じている。こうした学術界の熱い視線を受けて、台湾原住民の文化の中でも特にブヌンによる8部合唱は、その後、世界的に知られるようになった。

台湾内外からの原住民の伝統文化に対する関心が高まると同時に、その文化の保護や観光資源化に注目が集まると、台湾各地に「台湾原住民族文化園区」（屏東県）や「九族文化村」（南投県）といった原住民文化を紹介するテーマパークが建設された。そこでは、各原住民の伝統的な建築や生活様式の展示に加え、歌唱や舞踊の実演、装飾品の製作など、普段は接することの難しい原住民文化に直接触れることができ、非日常的な異文化体験を期待する国内外の観光客を魅了する場となっている。言い換えれば、建築物等の有形文化資源と、芸能や伝統的儀礼等の無形文化資源が融合したそうした「場」は、非常に有効な観光資源であり、パッケージ化された消費対象としても機能している。しかしながら、こうした観光産業と結びついた原住民文化が、果たしてその保護・保存・伝承において有益なのかどうかは判断が難しいところである。

2015年3月に訪問した、台東県延平郷桃源村にあるブヌン集落は、大農場で有機野菜を育て、観光客が宿泊できる施設も備えている。農場の一角には舞台も常設され、宿泊客が多い日には、ブヌンの伝統儀礼や歌唱・舞踊が農場で働くブヌン出身者によって無料で披露される。桃源村で長年、後進にブヌンの文化を伝承・指導してきた80歳（2015年時点）の女性シェワは、日本統治時代に身につけた非常に流暢な日本語で、ブヌン文化の伝承の状況について次のように語った。

彼女が日本統治時代に通った小学校は全員地元のブヌンの児童であったが、学校では「セツコ」と言う日本名で呼ばれ、ブヌン語の使用やブヌンの歌を学校で歌うことは禁止されていた。10歳の時に終戦を迎えて日本が台湾から撤退すると、その小学校では以前の厳しくも規律正しかった日本人教員による指導から、原住民のアミやパイワン出身の教員に代わり、学校や学業の環境は一変したという。シェワが幼少の頃は、様々な日常の場面で人が集まって酒が振舞われると自然と歌が始まり、人々が声を重ねることが当たり前の光景であった。だが、ブヌン文化の要である狩猟が禁止され、それに伴って集落での人間関係も希薄化すると、そうしたブヌンの生活に根付いていた風習や伝統的儀礼、歌や舞踊も伝承の危機を迎える。シェワは、父親から習った民謡を若い世代の農場の20代、30代のスタッフに長年教え続けているが、非日常的な舞台用の短い歌でなければ、現代の若者は覚えられないのだと嘆く。

こうした原住民の文化を保護・保存し、次世代へ継承していくためには、観光産業はその一端に過ぎず、当事者が幼少からその文化に触れ、その文化的価値を再評価することがまずは不可欠である。

2.2　若年層への原住民文化の継承と音楽を媒介とした文化発信

前節でも言及した通り、台湾では中学校に「郷土芸術活動」、小学校に「郷土教学活動」が科目として必修化されて20年近くが経過している。教育部（日本の文科省に該当）の指導下で台湾原住民の各民族に関する郷土教材も豊富に刊行され、建山国民小学校のように地域と連携して独自の教材開発が進んでいる学校機関もある。原住民の若年層における自文化への意識にも徐々に変化が見られているのではないだろうか。

そうした兆候の一つに原住民主催の音楽祭の増加を指摘することができる。毎年11月に台東の都蘭にて原住民アミのミュージシャンであるスミンが主催する「阿米斯音楽節」や、「桃園市原住民族国際音楽祭」、「看見・太陽在高雄原住民族音楽節」等、台湾各地で原住民の音楽祭が年間を通じて開催されている。

また原住民の若年層に見られる現象として、サンバのバツカーダ（打楽器隊バテリアによる演奏）が原住民の児童が通う学校の音楽活動として拡大している点が挙げられる。建山国民小学校も例外ではなく、ブヌンの伝統的な儀礼や歌舞などの学習と、サンバの練習はもはや一体化した活動となっている。サンバは、台湾にとっては地球の裏側のブラジル発祥であるが、なぜそれが原住民の若年層の音楽活動に取り入れられているのか疑問が湧くのも不思議ではない。その契機は日本人打楽器奏者が台湾でサンバの指導を開始したこと

に始まるが、比較的小学校の児童でも打楽器であるため導入が容易であり、集団での演奏から生まれる一体感もその魅力と言えるだろう。

台湾原住民達の若年層の間で、どれほど学校活動としてサンバ・チームが拡大しているかを目の当たりにしたのは、2017年10月21日に台北市内で開催された「第15回 夢想嘉年華 ドリームパレード」である。これは台北市の国立中正紀念堂前の自由広場を出発し、景福門の周囲を1時間かけて音楽演奏をしながらパレードする音楽とアートの祭典である。2017年度は国外や台湾全土から47チームが参加し、その三分の二以上は、原住民の子ども達が通う小学校・中学校のサンバ・チームである。主催者の「夢想社区（ドリーム・コミュニティ）」は芸術支援財団であり、台北市の協力を得て同祭典を毎年開催し、遠方から参加する団体には主催者から宿泊と食事が無料提供される。

参加した原住民の子ども達のチームは、自らの民族の伝統的衣装や装飾品を身につけ、サンバのリズムに合わせながら、時に各民族の民謡を歌い、伝統的な民族文化の要素がブラジルのサンバを媒介として、ハイブリッドな形で各原住民の文化を発信している。こうした今日の時代や若年層の嗜好や価値観に即した、新しい伝承・発信の場、そして自らのアイデンティティを再確認する場として、このような音楽活動や音楽祭が機能しているのである。

【写真７】建山国民小学校児童による
サンバ演奏の様子（筆者撮影）

【写真８】第15回夢想嘉年華
ステージの様子

3. まとめ

本稿では、台湾原住民の近年の母語復興や伝統文化の再評価の動向に注目し、ブヌンの児童が通う建山国民小学校における母語教育や伝統文化教育を事例として考察した。小学校に「郷土教学活動」科目が必修化されて20年近くが経過し、建山国民小学校においても学校現場が地域と強固に連携し、児童たちはブヌンの文化を学外での体験学習や、教員が自ら開発したデジタル教材を通して多岐にわたって学び、学校現場を中心として伝統文化の伝承が次世代へと継承されていることがわかった。また特筆すべき点は、伝統的な儀礼や歌・舞踊の活動と、近年原住民の若年層に拡大しているサンバ・チームの活動とを組み合わせて、学校が積極的に指導に力を入れていることである。原住民を中心とした音楽祭も年々増加の一途を辿り、音楽活動を通して、そうした場を活用して自らの民族的要素を外へ発信しているのも、今日の台湾原住民の特徴的な動向と言える。

謝辞

筆者の主な研究はインドの山岳少数民族ナガに関する、音楽を中心とした文化研究であるが、台湾原住民文化や伝承の問題にも様々な共通項があることを知り、今回初めて台湾原住民を対象とした研究調査を実施した。本研究にあたり、数多くの情報提供をして下さった高雄市桃源区建山国民小学校の陳俊延校長はじめ教員・児童、台東県延平郷桃源村のブヌン集落の方々、集落での調査通訳でご協力頂いた石原嘉人氏、2017年7月のシンポジウムで御発表頂いた石垣直氏、翁長巳酉氏、2017年10月パレード主催者の夢想社区 Dream Community に感謝申し上げる。本研究の一部

は、科学研究費補助金「インド・ミャンマー国境に暮らすナガのポリフォニー民謡に関する音楽民族学研究」（基盤研究C・研究課題番号16K02242）の助成による。

参考文献

石垣直（2016）「現代台湾における原住民母語復興（2）―教科書・教材内容の検討―」『南島文化』第38号、pp.1-27.

石垣直（2015）「現代台湾における原住民母語復興（1）―諸政策の歴史的展開と現在―」『南島文化』第37号、pp.1-24.

石垣直（2011）『現代台湾を生きる原住民–ブヌンの土地と権利回復運動の人類学–』風響社

稲垣スーチン（2005）「台湾における小学校英語教育の実施状況と問題点」『言語と文化』第4号、大阪府立大学言語センター、pp.125-131.

黄宣範（1993）『語言、社会與族郡意識―台湾語言社会学的研究―』文鶴出版

岡田恵美（2016）「少数民族文化の観光資源化と芸能としての復興のプロセス―インド・ナガランド州ホーンビル祭からの考察」『民族藝術』第32号、pp.149-155.

岡田恵美（2016）「ポップカルチャーとしての民謡の再興―インド少数民族チャケサン・ナガの多声的合唱「リ」の事例から―」『東洋音楽研究』第81号、pp.63-76.

黒沢隆朝（1973）『台湾高砂族の音楽』雄山閣

黒沢隆朝（1952）「高砂ブヌン族の弓琴と五段音階発生の示唆」『東洋音楽研究』第10・11号、pp.18-32.

原住民族委員会（2017）「原住民人口数統計資料–10609（2017年9月期）台閩縣市鄉鎮市区原住民族人口 - 按性別族別」人口統計資料 2017

呉榮順 他（2011）『我用生命唱歌―布農族的音楽故事―』玉山国家公園管理所

国立民族学博物館（1994）『台湾先住民の文化―伝統と再生―』国立民族学博物館

達西鳥拉弯 畢馬（1999）『走入布農族的世界』海翁出版社

田辺尚雄（1968）『南洋・台湾・沖縄音楽紀行』東洋音楽選書5、音楽之友社

谷口龍子（2005）「台湾における「郷土言語」教育とその問題―『国民中小学校九年一貫課程』（2001）を中心に―」『ICU 比較文化』第37号、ICU 比較文化研究会、pp. 65-86.

ヤユツ・ナパイ（2009）「台湾原住民族部落スマグスにおける観光事業と多文化教育–タイヤル住民の『部落を教室にする』実践」『日本台湾学会報』第11号、pp.177-197.

余錦福 編（1998）『国中小学郷土教材「祖韻新歌」台湾原住民民謡一百首』台湾原住民原縁文化芸術団

参照ウェブサイト（下記全て2017年10月30日閲覧）

財団法人 原住民族文化事業基金会（原住民族電視台 TITV16、原住民族廣播電台 FM96.3 Alian radio）http://www.ipcf.org.tw/

「原住民族語言発展法」（全30条）http://www.rootlaw.com.tw/LawArticle.aspx?LawID=A040350000004700-1060614

夢想社区 Dream Community　http://dreamcommunity.tw/

[1] 台湾では、「先住民」という表現を用いず、「台湾原住民（族）」が自称・公称とされている。本稿においても現地の状況を尊重し、「台湾原住民」という表記を使用する。

[2] 2011年公開の台湾映画『セデック・バレ』では霧社事件が描かれ、2013年に日本でも公開された。

[3] 黒沢の示唆する「Do-Sol 終止の旋法」とは2種あり、I型は F-G-A-C-D で即ち四七抜き長音階と同様の音列である。II型は C-D-F-G-A で律音階と同様の音列を示す。

[4] 2017年度は琉球大学サンバ・チームとして本学学生も約20名初参加し、琉球空手を取り入れたサンバの演奏に沖縄の紅型やエイサーの衣装でパレードやステージを沸かせた。